

ふくりゅう

発行所 日本下水文化研究会運営委員会
 発行責任者 谷口尚弘(運営委員会副代表)
 発行年月日 平成9年3月15日
 印刷所 (株)愛甲社
 編集 小松建司 新澤紀明
 冬号(通巻7号)

日本下水文化研究会 第2回総会開催決定

みなさまのお手元にすでにお届きの事と思いますが、来る3月29日(土)神田学士会館に於いて、日本下水文化研究会第2回総会が開催されることになりました。北海道大学総長丹保憲仁氏による記念講演は会員に限らず広く解放したいと考えていますので、お誘い合わせの上ご参集下さい。

また、同封されておりました葉書は、どちらかをチェックの上お名前を必ず書き込んでお出し下さい。

日本下水文化研究会は、皆様のご支援とご協力のもとに活動を続けております。この会報も、皆様とのコミュニケーションを多くしたいと考え発行をしています。普段逢えない会員の皆様と逢えるのは、このような総会や、研究発表会などのイベントの時です。多くの皆様の参加をお待ちしております。そして、入会のご案内にあるようにボランティアとしての活動を活発にし、この会報にも、いろいろなご意見や記事、その他情報をお知らせ下さい。お待ちしております。

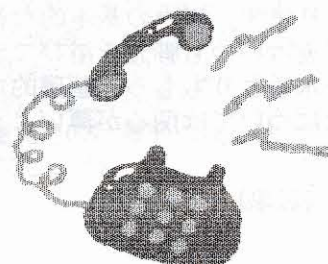
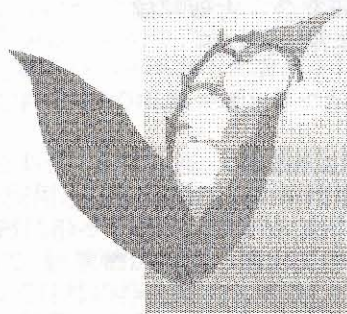
あり方検討懇談会 開催される

2月7日夜6時過ぎに神田学士会館にて、あり方検討懇談会が開催された。冒頭の挨拶で、稲場代表から要旨が説明され、「この会は、今まで良い仕事が出来た。これは、上下水道界に有益な影響を与えてきたと思われる。改組から5年が立ち、この会の今後のあり方、継続するのならどのような活動を行っていくのか審議を頂きたい」と結ばれた。続いて、酒井運営委員からこれまでの活動と、今後の活動を整理し、活動を継続する為の必要性な体制や、財源等についての問題提起がなされた。

西堀代表評議員から「今後の活動を活発化するためには、稲場氏の情熱が必要であり、今後とも本会を支えて頂きたい。そのためは体制の強化が必要である」と答えられた。その後、各運営委員と評議委員から活発な意見交換があり、2000年に向けて、今後も活動を継続していき、あり方も継続して検討をしていくことを確認し、8時30分閉会した。

出席者
 評議委員 西堀氏・古沢氏・石田氏
 運営委員 稲場氏・谷口氏・酒井氏・
 佐野氏・石井氏・小松氏

(佐野委員議事メモより)



本の紹介

「江戸 神田の下水」 が紹介されていました

「江戸のみちはアーケード」《鈴木理生著 青蛙房 2472円》という本の中で、当会が刊行した柳下重雄氏の下水道文化叢書第一号「江戸 神田の下水」が紹介されています。

◇江戸以来の東京の中心にある市街地の下水道の実態は、手近かに見られる資料としては、『中央区沿革図集』[日本橋篇]・[京橋篇]（中央区教育委員会刊）のなかの「寛保・延享沽券図」や『江戸 神田の下水』（柳下重雄著 日本下水道文化研究会 九三年刊）で十二分に見ることができます。（175ページ）

「江戸のみちはアーケード」という本は、江戸から明治にかけての江戸・東京の道路を“輪切り”にして都市施設がどのように変わったかを見ています。

著者は底下とそこにあった下水が公・私共有の地であったと述べています。当然江戸の町の下水についても興味ある記述がされています。そのごく一部分をご紹介します。

◇町人居住地の底下にある公儀下水にはその町の町人が「ぬき」（貫木）で「すのこ」状のフタを“キッチリ”とするように指示されています。

これを現在ふうに言い換えると、店先のスペースの有効利用のために、アーケードを許可したのだから、公共下水のフタは自分たちの負担で作れということです。『江戸名所図会』に描かれた都心部の町を丁寧に見ますと、たいていは「すのこ」ではなく、石の立派なフタが描かれています。これはその商店の財力を反映したものだったのでしょう。（31ページ）

◇このように細かく見ていけばいくほど、“下水の周辺”には複雑な条件が目につくようになります。江戸の基本的な都市施設として、上水道はいつも脚光を浴びてきましたが、なぜか上水道よりももっと基礎的な都市施設だった下水については関心が薄いようです。（34ページ）
〔栗田〕

「水・河川・湖沼関係文献集」 という本が発刊されました。

発行は、古賀邦雄氏（水文献研究会）によるもので、明治15年から、平成6年まで発刊された文献を発行年度別に整理するとともに、分類法も、「日本十進分類法」によらない独自の方法で行われている。

この文献集には、今では手に入らない貴重なものや、市販されていない文献まで含まれ収録されている。

主な収録内容は、

1. 国内で発行済みの水・河川及び湖沼関係の単行本
2. 明治年間から平成6年まで発行の図書1万冊分

である。

また、分類法は35項目に分けられ

1. 文学 2. 紀行 3. 歴史 4. 水運 5. 民俗
6. 水車 7. 地理 8. 社会 9. 生活 10. 法律
11. 経済 12. 農業用水 13. 農業用水史 14. 環境
15. 親水 16. 公害 17. 水資源 18. 水道 19. 水道史
20. 工業用水 21. 下水道 22. 下水道史 23. 水力
24. 森林 25. 治水 26. 治水史 27. 水害 28. 橋
29. 地下水 30. 水質 31. 科学 32. 生態 33. 年鑑
34. 工事史 35. 児童書

となっている。

内容は、発行年別に分類法順で書かれ

分類 書名 著編者名 発行所 定価 所蔵
が解る。また、書名の索引でも調べることができる。

この本は、文献を探している人にとって貴重な1冊となるであろう。

定価5000円

申込先

〒761 香川県高松市花の宮町1-8-41

水文献研究会 古賀邦雄

TEL(0878)62-2218

藤原京と平城京の下水

岩波新書「古都発掘」から藤原京と平城京の下水に関する記述を抜き出してみました。

❖ 藤原京の側溝

○『朱雀門の南約200メートルのところで、1976年に朱雀大路を発掘しました。そこでは、路面の幅は17.7メートル、東西両側に幅7.1メートルの側溝があり、側溝の中心の間の距離は24.8メートルになります。』

○『街路の旧路面は、後世に削りとられているため、どのような状況にあったのか、わかりません。平城京の朱雀大路の場合、路面の中央をやや高く盛り上げ、横断面をカマボコ状にして、雨水が側溝に流れこむようになっていました。』

➤ 江戸の町中の下水幅は、町境にあるものでも3メートルくらいが大きな方でした。

街路の両側にあった雨落下水は30センチくらいだったでしょうか。それに比べるとかなり大きな側溝がつくられていたことになります。路面の中央を高くして両側の溝に雨水が流れこむように街路をつくるように命じたものが江戸の「町触れ」の中にもありますが、そりより以前、織田信長が安土に築いた城下町の街路も同じようにつくられていたのが始まりかと思っ
ていましたが、そのような道造りが、7世紀(690年)にまで遡るとは驚きました。

❖ 藤原京のトイレ

○『1300年前の藤原京には、大和高田市や香芝ほど人口が集中していました。これだけの人が集まって生活すると、都市問題が発生したにちがいない問題です。いま、どの都市でも、ゴミと尿尿の処理が大問題です。藤原京では、どうだったのか。』

人間の排泄物を好き勝手に垂れ流すことはできません。藤原京の発掘調査では、1992年以来、トイレの跡がつつぎとみつかっています。宅地の隅に掘った長さ1.5メートル、幅30センチほどの長楕円形の穴のくみ取り式のトイレがあり、街路の側溝の水を宅地内に引き込んだ幅50センチほどの溝を使って水洗式トイレとしたものもあります。次の平城京跡でも同じようなトイレがみつかっています。藤原宮の中からは、幅5メートルもある大溝の上に跨ぐように建てた、文字どおりの川屋＝厠も見つかっています。』

○『数万の人たちが、連日連夜、くみ取り式や街路の側溝の水を利用した水洗式のトイレを利用していたのです。街路に沿って網の目のようにめぐらされた側溝を通して、排泄物が河川へ流れていきます。いまと違って自然の浄化能力に頼るしかありません。濁水のと時期に大量に流されると、浄化能力

を超えることは目に見えています。』

➤ 本書によりますと藤原京の頃にも取締りを命じていたそうですが、江戸の「町触れ」でも、再三、下水の上に小屋雪隠を作っ
てはいけないと命じています。人間のすることはいつの時代でも、そんなに変わらないようで…。

❖ 平城京の側溝

○『最大の街路は、いうまでもなく朱雀大路です。平城宮の正門にあたる朱雀門から都の南辺の羅生門まで、南北約3.7キロ、発掘結果によると、路面幅は67.5メートル、両側に幅7メートルほどの側溝がありました。』

➤ 藤原京から平城京への遷都は710年。藤原京の朱雀大路の幅は17.7メートルであったのに、平城京の朱雀大路の幅は67.5メートルと四倍ちかくも広げられたのに、側溝の幅が変わっていないのはどうしてなのでしょう。それにしても幅7メートルの側溝とは…。

❖ 平城宮のレンガ積み溝

○『平城宮の中央の大極殿一画は、南につづく朝堂院からみると、いちだん高くなっています。境の段には、大型のレンガを積み上げて擁壁としていました。奈良時代中ごろ、この地域一帯を大改造したのですが、そのときこのレンガのほとんどを取りはずしました。はずしたレンガはどこへいったのか。宮城内の東部にある役所の建物の周囲の舗装用に転用したのです。近くにある大型の溝の壁面にもこのレンガを積み上げていました。レンガのリサイクルです。この役所の建物は、長岡京に遷都するとき、解体して運んでいます。』

➤ レンガが横浜居留地の下水や神田下水と同じようなものだったのかどうかはわかりませんが、宮城内とはいえ溝の側面をレンガ積みになっていたとは、これも驚きです。

❖ 長屋王邸の水洗式トイレ

○『二条大路を隔てて長屋王邸の北になる街区では、東辺に沿って幅10.5メートルほどの小路が通っており、この小路の西にある邸宅では、小路の西側溝から斜めに溝を掘って邸宅内に水を導いていました。邸内に入ると、板材を組んだ内法40センチほどの溝となっているのですが、この板を組んだ溝部分は、土中の寄生虫卵の調査結果などから、一種の水洗便所だった、とみてよいようです。流れる水とあふれた排泄物は、ふたたび街路の側溝へ下手でもどっていきます。側溝は下水道でもあったのです。』

➤ あまり衛生的ではなかったでしょうが、水洗式トイレを使えたのは身分の高い人たちだけだったのでしょうか。

(栗田)

「水は神の恵み？」

豊島区立郷土資料館のYさんが資料を送って下さいました。資料の名は『失われた東京の川—谷端川・小石川（千川）』。真坂道夫さんという方の執筆によるもので、その「おわりに」の一節にこういう記述があります。

『我々の祖先は、滾々と湧き出る泉に神の働きを見出し、そこに社を設け、神聖な場所とした。崇敬する人びとの手によって守られ、これを汚すことは許されなかった。そこから流れ出る川についても、同じであったろう。農業用水としてばかりでなく、水車の動力源であり、祭祀の場であり、洗濯等家庭労働の場であると同時に憩いの場であった。子供たちには、水泳、魚釣りとはさまざまな遊びの場であって、村人には川のない生活は考えられなかったと思われる。川は多くの恵みを与えてくれた。しかし、時には溢れ、田や家を埋め、流し、恐ろしい存在となった。（中略）川を清浄に保ち、常に恵みが得られるように管理することは、

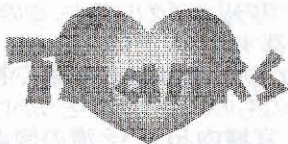
共同体たる村の重大な責務であった。夏には「かいぼり」をして、鯉や鰻をとったとの話が伝わっている（板橋の河川）が、それは堰や用水路の点検修理の機会であった。』

谷端川は豊島区から板橋区にかけて流れていた上流から中流にかけての名で、大塚駅の辺りから文京区へ流れ、下流では小石川とか、千川と云われていました。谷端川も小石川も、埋め立てられていて、そのあとは公共下水道の幹線になっています。

昔の人たちにとって、水はまさに神の恵みだったのだと思います。だから、水を汚すことは許されるものではなかったのでしょう。そして『川を清浄に保ち、常に恵みが得られるように管理することは、共同体たる村の重大な責務』でした。

現代に生きる私たちは川が下水道になったことで、「水は流してしまえばお終い」にしているのではないのでしょうか。人びとがそういう風に考えるように、近代下水道ができて来てしまった……、そんなことを感じさせられる資料でした。

（栗田）



編集後記

発行予定がだいぶ遅くなってしまった。もう目の前に春が！あわてど叫べど原稿が……そんな時期に冬号で、どうもすいません。

今回は、会計関係で、みなさまにとってもご迷惑をかけてしまいました。会費を納入したのに請求がきたという会員の方には大変申し訳ございませんでした。今までのシステムを変えたための混乱で今後は大丈夫？と思います。

（建）

お詫び

ふくりゅう 秋号（通巻6号）1ページ目の「三大地震写真展無事終了」の記事の中で、小平市の松井部長とありましたが、小平市の松田部長に訂正させていただきます。松田部長には大変申し訳ございませんでした。

ふくりゅうでは原稿を募集しています。身近な話題などでも結構ですので送ってください。

〒267 千葉市緑区土気町1580-66

小松 建司

どしどし送ってください。